インタビュー❶

茨木とりすき共創部

茨木共創部 茨木の名物づくりチーム

～一人の“熱い”想いから始まる共創～

【概要】

茨木の新たな名物として「とりのすき焼き」のレシピ開発や普及啓発に取り組む「茨木とりすき共創部」。令和6年度の茨木共創部で「名物づくりチーム」として茨木商工会議所の中野拓二さんを中心に市民10名で発足し、歴史的な視点や市民に対する実態調査、試食イベントやレシピ開発などを実施しました。令和７年度に入ってからは、新たな仲間も増やしながら活動しており、今回はそのコアメンバーである、中野拓二さん、さっちーさん、浅川和彦さん、的場理さんにお話を伺いました。

【主体】

- 市民（茨木商工会議所職員、会社員、中間支援団体職員、福祉職、デザイナーなど）
- 事業者（成田家）
- 市職員（共創推進課）

【協力】

- 事業者（みしま館、とり粂、季ごころ廣など）

このチームは中野さんの熱い想いから生まれたと聞きましたが？

中野さん

的場さんから「茨木共創部をはじめるので、一つのチームの発起人的な立場で参加しませんか」と話をいただいたのがきっかけです。そこで、初回のワークショップで「茨木の新たな名物を生み出したい」という、以前から抱いていた想いを話しました。すると10名ほどの、初対面のメンバーがこのチームに参加してくれました。商工会議所で仕事をしていると企業や商店の方とのつながりが多いので、今回のようないろんなバックボーンをもった「市民」との関係は新鮮でした。

さっちーさん

私は、まさにその初回のワークショップからこのチームに入ったメンバーです。最初に4つのテーマが提示されて、それぞれのテーブルをぐるぐる回りましたが、最後に名物チームに決めました。以前から茨木市の魅力をSNSで発信する活動などをしてきた中で、なんとなく「茨木には名物が少ない」と思っていたこともありましたが、中野さんの熱い想いと、直感的に「このチームは楽しそう！」と思ったのが理由でした。

「とりすき」がテーマとして共有されていった経緯は？

中野さん

茨木の新たな「名物」の可能性について、各メンバーの想いやアイデアからたくさんの学びがありました。自分の頭の中では常に「とりすき」があったのですが、当初は自分の想いをどれだけ前面に出すのがいいか躊躇していました。また、これが茨木の名物だと言える明確な根拠に乏しいのではという不安もありました。ところが、取り組みを進める中で、メンバーが周囲にヒアリングしたりアンケートをとったり、茨木の郷土資料などの文献を調べていくと、茨木と「とりすき」に関する興味深い生活文化やエピソードが発見できました。この時、自分自身もチームメンバーも「これはいける！」という感触を得ることができました。

中野さんを中心に、各メンバーが特技を活かしていますよね？

浅川さん

私は1年目の試食イベントの際に、料理の指導役として参加しました。2年目に入ってからはメンバーの一員として毎回のミーティングにも参加するようになりました。自分にしかできない役割を持ちつつ、徐々に参加の立ち位置にも変化が出てきたと感じています。飲食店を営む立場としてとてもありがたく思っていますし、こういったことに取り組む市民がこれだけいることに驚きも感じています。

中野さん

試食イベントの実施は大きなポイントでしたね。美味しいものを食べると、単純なことだけどみんなのテンションが上がる。まずはそこで浅川さんの力を借りようと思いました。また、デザインが得意な人がステッカーをつくったり、SNSで動画を発信する人がいたり、それぞれが得意なことを活かして参加してくれています。

このチームの強みについてどのように感じていますか？

的場さん

リーダーの熱い想いがあって、その想いを叶えてあげたいと考えるメンバーが集まったことが大きな強みですね。また、無理せず楽しむことを大切にしていることも共有できていると思います。決められた期間で結果を出さないといけない「仕事」とはまた違ったゆるさがこの活動を続けられる秘訣だと思います。

さっちーさん

「食」をテーマとしていることが強みだと感じています。みんなでつくった美味しいものを、一緒に食べることは関係性をつくるにはもってこいのテーマですよね。それと「アレンジ」の可能性や楽しさがあること。親子丼にアレンジしたレシピを考えたのも楽しかったです。より美味しいものがつくれるかもしれないというワクワク感も得ることができました。

中野さん

メンバーからどんどん新しいアイデアが出てくる。今後は「ファンクラブ」のような枠組みをつくるというアイデアも出ています。これからも「とりすき」を通じて茨木における人の輪をつなげていきたいですね。

インタビュー❷ シニアディスコ

～「ええやん、やってみようや」の楽しさが連鎖する共創～

【概要】

高齢者の居場所づくりを目的としたシニアディスコは、豊川地区を対象に、「とよかわシニアディスコ！」として令和６年から始まりました。会場は「豊川いのち・愛・ゆめセンター」で、「とよかわのおばあちゃん、おじいちゃんも来て楽しんでもらい、新鮮な刺激を得られるイベントにする」を目的に、地域の福祉関連の主体とダンス指導者、ＤＪなどといった、普段は交わらなさそうな異色のコラボで実施しました。令和７年度は、活動の実験場・見本市をテーマにしたおにクルEXPOを会場に「だれでもディスコ」としてバージョンアップ。誰でも安心して楽しめる場になるよう、安全管理などにも気を配り様々な機関が連携する中、老若男女、たくさんの人たちが一緒に踊りました。

【主体】

- 事業者（豊川・郡山・彩都西地域包括支援センター、相談支援事業所あゆむ、いきいきネット相談支援センター、常清の里、ミラーボール製造会社、ウォーターサーバー提供会社）
- 大学・学校（追手門学院大学）
- 自治会・自治組織（人権豊川地域協議会）
- 市民（ダンス指導者、DJ、司会、バーテンダー、シニアディスコ愛好家）
- 行政（人権・男女共生課、圏域ごとの地区保健福祉センター）

シニアディスコに関わったみなさんに
それぞれの立場からお話をうかがいました。

企画づくりの会議の雰囲気はどんな感じでしたか？

会議の場がとても大切な時間でした。参加者それぞれが持つ理想や視点が違う中で、話し合いを続けていくと、誰でも参加できる場にしたい、茨木市民28万人の縮図をつくりたいなど、重なり合う部分が自然に見えてきました。また、一人ひとりが自分の考えや想いをちゃんと話せる場だったので、妄想が膨らむ場になり企画の質が上がりました。会議がとにかく楽しかったです。企画づくりの段階から、DJ、ダンサーさんが会議に参加してくれたので、運営側が抱えていた課題が「それ、できますよ」と即解決することもあり、見えている世界が違う人が集まることで、想像を超える企画に育ちました。

実際にやってみてどうでしたか？

保健福祉センターなどの福祉職のメンバーが参加してくれたので、誰でも来てください！と言えるための安全設計ができました。続けていくためにも、ただ楽しいだけではなく、安全にできてよかったです。エピソードとしては、DJタケセンさんから「仕事の関係で緊急に関わって欲しいケースがある」と連絡があり、必要なメンバーに声掛けしたら、みんなディスコチームだったということがありました。ディスコでのチームワークのおかげで、短期間で支援体制をとることができました。行政だけでやっていたらこんなにうまくはいっていなかったと思います。

事務局を担当した人権・男女共生課
和田吉博さん

今後の展開は？

シニアディスコの取り組みが各地域に広がっていってほしいと思っています。それぞれの地域の特徴に合わせて形を変えながら、地域が主体となって開催できる形をつくっていけたらいいなと思っています。

この取り組みに参加したことでのご自身の変化は？

介護・福祉職としての習慣で、つい「危ないかも」「無理かも」と先回りしてしまうことが多かったのですが、歩行器を利用して会場に現れた高齢の参加者が、30分踊り続けた姿を見て、本人の意思を尊重し、まずは挑戦してもらうことが大切だということに気づかされました。もちろん、スタッフとして安全管理は大切ですが、シニアディスコはスタッフも参加者も同じ“踊る仲間”として、一緒に楽しめる空間。チームで取り組むと時間も手間もかかるけど、一人だったら絶対に思いつかない展開がどんどん生まれていくのが発見でした。

豊川・郡山・彩都西地域包括支援センター
山本瑞枝さん

追手門学院大学
岩渕亜希子さん

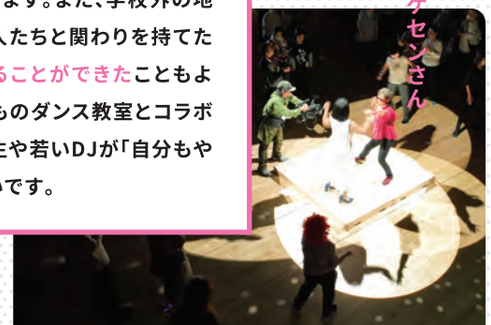
シニアディスコの取り組みの魅力はどんなところにありますか？

大阪市都島区でシニアディスコを立ち上げた佐々木さやかさんを豊川地域での講演会にお呼びしました。参加していた地域の方が講演会が終わるや否や「豊川でもやりたい」とすぐさま作戦会議が始まり、その熱量に感動しました。実際にやってみると、上手に踊る必要はないし、自由でいいという空気が、初めての人でも入りやすい雰囲気になっていました。何より主催者側も日ごろ大変な現場でお仕事をされている福祉職の方々などが楽しんでいることが価値だと思いました。最初に始められた豊川地域の中心メンバーが楽しそうにしていること、周囲の人も「やってみたい」と思う楽しさが連鎖していったのが印象的でした。男性同士が自然に集まって“男子会”が生まれたり、女性グループがDJと写真を撮って“乙女の顔”になったり、こどもが練習会に毎回参加するほどハマったり。認知症になっても暮らし続けられるまちづくりが私の研究テーマですが、シニアディスコはまさにその入口になっていて、“楽しい関係”は、後々の支援や見守りにもつながっていくのだと思います。

シニアディスコの取り組みを通じて、ご自身の活動に広がりはありましたか？

19歳から趣味でDJをやっていました。和田さんがDJを探しているときに、声をかけてもらい参加するようになりました。音楽で茨木のまちを盛り上げたいという思いがあったのと、豊川地域のみなさんの「ええやん、やってみようや」という雰囲気に共感して、楽しそうだなと思いました。市内の小学校の校長をしているので、卒業生・地域のこどもたちが会場に来てくれたこともあります。また、学校外の地域住民、保護者、福祉職、市職員など、普段は接点のない人たちと関わりを持てたことや学校と地域のつながり、顔の見える関係性をつくることができたこともよかったです。この取り組みをきっかけに、障害のあるこどものダンス教室とコラボし、「いばフェス」にも出演するようにもなりました。卒業生や若いDJが「自分もやりたい」と参加し始めてくれるようになったこともうれしいです。

DJタケセンさん



インタビュー❸

まちづくり検討会議

～プロセスが価値になる地域の共創～

【概要】

地域活動を住民と学生が共に進めていく取り組み。この取り組みでは、ワークショップ形式での話し合いを通じて、双方がアイデアを出し合いながら進めていくことを大切にしており、既存イベントの準備を学生が手伝うだけなど、学生が提案できる余地がない活動は、連携の対象としていません。地域側としては、取り組みを通して様々な学生と関わることで、あらためて地域の現状を整理したり、多様性を受け入れる機会になったりしています。一方、学生には、学生ならではの視点で出したアイデアを実践できる場になり、学生時代にがんばった経験として、就職活動に活かせるなどのメリットがあります。

【主体】

- 大学・学校（公募で集まった大学生）
- 自治会・自治組織（地域自治組織、地区連合自治会）
- 行政（地域コミュニティ課）

行政担当者インタビュー

まちづくり検討会議を始めたきっかけを教えてください。

まず、隣の自治会同士が、お互いにどんな活動をしているか知らないということから、活動内容を共有することで課題解決につなげられるような事例集を作成することになりました。また、市内に5つの大学、約２万人の学生がいるため、大学に通うだけでなく、地域活動を知ってもらいたいという想いから、市と市内大学の連携会議に出席し、自治会活動の取材を学生と一緒に取り組む「知って、学んで、つながる」企画を提案しました。学生と地域のみなさんが取材を通じて交流する中で、地域の方から取材だけではなく、学生と一緒に連携して取り組みたいという声が上がったのをきっかけに、「まちづくり検討会議」をはじめました。

学生のみなさんと一緒に取り組む中で、これまでにはなかったこと、新たにできたことはありますか？

防災訓練にゲーム要素を取り入れる「防災（かける）×○○」という掛け合わせのアイデアや、イラストが得意な学生によるチラシやポスター作成など、これまでなら思いつかなかった発想が生まれました。楽しく話し合える雰囲気を醸成できたことで、学生と地域のみなさんがお互いにとって良い刺激になり、ポスターを見た地域の方からは、学生が描いたイラストを行事の記念品のお菓子のパッケージにしよう（菓子メーカーのサービスを利用）というアイデアも出ていました。まちづくり検討会議の活動をきっかけに、関わった地域でこども食堂のボランティアに参加するようになった学生が、こども食堂を含む地域の居場所を卒業論文の研究テーマにするなど、学生の学びの場につながったこともうれしい出来事でした。参加学生については、これまで、ほとんどが追手門学院大学や立命館大学からだったのですが、令和７年度は、市内の公共施設や商業施設に配架したチラシを見た関西学院大学や同志社大学の学生からも応募があり、約40名の学生が参加してくれました。

これからの地域や自治会との共創をどのように進めていきたいですか？

まちづくり検討会議は今後も継続していきたいです。それと合わせ、自治会などの地域の方々とのつながりやまちづくり検討会議などで培ったつながりを活用し、様々な部署や事業と連携することで、茨木市の共創のまちづくりをより一層充実していくことができるのではないかと思います。

参加者の声

立命館大学 西山さん
お互いの意見を尊重しながら カタチにしていく過程そのものが貴重な経験

1年目に取り組んだ活動の中で特に印象に残っているのは、地域の魅力を発信するウォーキングマップの作成です。学生がつくりたいマップと、地域の方々が求めるマップとの間に違いがあり、思い通りに進まない場面も多くありましたが、何度も話し合いを重ね、試行錯誤を繰り返すことで、双方が納得するものに近づけることができました。立場が違うからこそ生まれる視点があり、お互いの意見を尊重しながらカタチにしていく過程そのものが、貴重な経験となりました。
2年目に取り組んだ地区体育祭や手づくりまつりでは、事前の準備や当日の運営に、多くの人と時間がかけられていることを間近で知ることができました。普段何気なく参加している地域行事が、多くの支えによって成り立っていることを実感する機会となりました。そして、得意としているイラストを活かし、行事のポスター作成を担当しました。自分のアイデアや制作物が実際に地域の活動で使われ、評価していただけたことは、大きな自信につながりました。

追手門学院大学 嶋本さん
まちづくり検討会議で知り合った方とのご縁で、茨木市内のこども食堂でボランティア

おまつりの企画から準備、当日の運営まで、年齢や職業が異なる方々と一つのチームになり、同じ目標に向かって活動する経験ができたことは貴重な経験だったと思います。また、おまつりの案出しや準備の際に「その考えは思いつかなかったな」「その案、おもしろいな」と他の方の意見を聞いて感じる場面が多々あり、新たな視点を得ることができました。
チームの仲間と協力して準備をしてきたからこそ、当日来てくれたこどもたちが楽しそうに遊んでいる様子を見て、達成感とやりがいを感じることができました。
そして、まちづくり検討会議で知り合った方とのご縁で、茨木市内のこども食堂のボランティアをさせていただいています。また、大学が実施するこどもの居場所づくりプロジェクトに参加したり、大学の卒業研究では「地域活動、地域の居場所」というテーマで学びを深めることができました。
まちづくり検討会議に参加したことで様々な経験や新たな目標ができたように、今後も「挑戦する気持ち」と「つながり」を大切にしていきたいと思います。

インタビュー❹

チャレンジいばらき補助金

～「やってみたい」の種まき、挑戦の芽を育てる共創～

【概要】
市民活動団体が実施する活動に対し、活動の活性化、ひいては共創のまちづくりの推進を目標として、補助金の交付および伴走支援を行っています。団体が自由な発想で提案する「自由テーマ型」や、学生を対象にした「学生等連携」などがあり、令和7年度からは、行政が提示するテーマに行政と連携して取り組む「共創型」が加わりました。

【主体】
- 団体（補助金応募団体）
- 行政（関係課）

むすびや 寺こや（むすびとまなび食堂）× こども政策課

活動内容

三島コミュニティセンターなどで、ひきこもりや不登校、障害のあるお子さんをもつご家庭を中心に、地域の誰もが集える交流会やイベント、こども食堂を企画・運営しています。同じような境遇の人がお互いに交流し、悩み相談や情報交換ができる機会をつくることで、孤育て（孤独な育児）の減少や、誰もが生き生きと暮らせるきっかけとなる居場所づくりを目指しています。地域の方に自分の得意を活かして講師として参加してもらうプログラムもあります。

行政との共創による効果

行政がとりまとめるこども食堂ネットワークへの参加により、資金面での活動支援を受けられるようになったことと、市のホームページやチラシで広報をしていただけるようになったことが大きかったです。こども食堂では、茨木産の野菜や少し高価でも無添加の調味料などを使えるようになりました。また、行政の方と知り合いになれたことで、参加者からの相談を適切な窓口につなぐことができるようになったことも大きな変化だと感じています。

行政の立場から

こども食堂を見学させていただき、自分の中のこども食堂のイメージが変わりました。こどもたちだけのためではなく、地域のみなさんのための居場所になっているなと感じました。その気付きがこども食堂に加え、こどもの居場所活動についても、活動を応援していこうという動きになりました。現場の様子を直接見て、生の声を聴かせていただけたからこそ、新たな展開につながったと感じています。

SUTAMO-family 福祉啓発ユニットLanT'rkいばらき × 障害福祉課

活動内容

福祉にあまり馴染みのない人たちにも、「楽しみながら障害福祉を知る」きっかけとなるFUKUSHIマルシェをおにクルで開催しました。障害福祉サービス事業所のマルシェのほか、キッチンカー、市民団体によるワークショップ、ステージコンテンツ、消防署による車両展示など、障害福祉関連だけでなく、多様な分野の方々にブース出店してもらいました。

行政との共創による効果

イベント開催にあたり、障害福祉課から市内の福祉事業所に出店募集や開催案内を行っていただけたので、これまでつながりがなかった団体とも連携することができました。会場使用料などを補助金でまかない、おにクルでイベントを開催できたことで、気軽に来館者が立ち寄る機会を創出できたことも大きかったです。当日は障害福祉課を含め、多様な主体に出店いただいたことにより、色んな分野の人が混ざり合い、交流が生まれるなど、来場者・出店者双方に、新たな価値やつながりが生まれたイベントになりました。

行政の立場から

この取り組みが、現場に足を運ぶ機会になり、職員と福祉施設の利用者やそのご家族と直接対話することができました。おにクルという身近な場所で開催されたことで、休憩時間を利用して気軽に会場に足を運べるなど、現場を肌で感じる大変よい機会になりました。

みんなの楽農コミュニティ × 農林振興課

活動内容

農業に興味を持つ消費者と農家が交流し、気軽に援農できる環境づくりを目指して、新規就農者や若手農業者を中心とした12名で活動しています。その活動の中で、令和7年度は、茨木産のゴマ「イバゴマ」の種まき、収穫、選別といった農作業を市民参加型のイベントとして実施しました。また、これらの農作業体験に加え、トラクターの乗車体験や焼き芋・落花生の試食体験なども企画し、多くのお子さんにご参加いただきました。

行政との共創による効果

市と連携できたことはメリットばかりでした。特に、広報8月号にイベントの参加者募集記事を掲載いただいたところ、広報記事を見て多くの参加者が来てくれました。また、チャレンジいばらき補助金についても農林振興課の方から教えてもらい、活動を広げていくことができました。行政と連携して活動することで、様々な制度について知ることができますし、地域貢献にもつながっていくと感じています。

行政の立場から

農業や農業体験に興味があるという声をよくいただくのですが、これまで紹介できる活動先が限られていました。みんなの楽農コミュニティさんは、気軽に参加できる活動から本格的な農作業まで幅広く活動されているので、行政が自信をもって紹介できることは大変助かっています。さらに、参加者の中には農業を学びたいという人もいて、市の事業として実施している就農支援塾「あぐりば」や「地域農家制度」を案内することもできました。

おわりに

共創という言葉は、近年多くの自治体や企業で使われていますが、その定義としては、「多様な主体が協働しながら新たな事業やサービスを創り出す」というイノベーション的な文脈で語られることも多いようです。一方で、茨木市においては、これまでの取り組みから、事業やサービスという「結果」(アウトプット)だけでなく、それまでの「プロセス」や生まれた「関係性」(アウトカム)にも多様な価値があるのではと感じていました。この冊子の作成は、そんな気づきも出発点となっています。

『茨木版 共創デザインブック』の作成を通じて、様々な事業の担当者に話を伺いましたが、立場や世代を超えた多様な参加によって、社会課題の解決だけでなく、関わる一人ひとりの生活や人生がちょっと豊かになったりする、そんな茨木ならではの共創が見えてきました。

まちに出かけたら、公園では蚤の市が開かれていて、たまたま出会った陶器のマグカップと作家さんの人柄に一目ぼれ。また来ようと次の予定を検索しながら、作家さんをフォロー、実は自分でも始めてみたいとちょっと陶芸教室を調べてみたり…そんな日々の暮らしの偶然から生まれた、出会いや出来事、小さな幸せやワクワク感もまちの景色の一つであり、新たな活動が生まれる共創の種だと思っています。

この冊子で紹介した「4つのC」(Communication、Collaboration、Cheerful、Challenge)は、茨木らしい共創の大切な要素です。これらを参考にしていただくことで、取り組みにはたくさんの「共感」が生まれ、そこから楽しく美しい「物語」が紡がれるかもしれません。そんな茨木の共創の未来をみなさんと一緒につくってけると幸いです。

茨木版共創デザインブック
令和８年３月

インタビューに協力してくださった方々（敬称略）

浅川和彦　岩渕亜希子　うー農園　櫻井久美
さっちー　瀧本優哉　DJタケセン　中野拓二
まっきー農園　森口さゆり　山田美沙　山本瑞枝

「茨木版共創」デザイン検討会議参加職員

橋本匠　岩倉佑莉　鬼本和加子　松盛千歌
秋本卓哉　和田吉博　中村ゆかり　佐原寛則
齋田綺香　杉山琴美　鈴村いずみ　西岡雅人
正木友希　大西彩　伊東尚美　森永みなみ
郡知子　西口雄輔

共創推進課

向田明弘　山脇知郎　吉田巧　的場理
曽根崎俊　松井佑梨子　岡田倫太朗　森千夏
高木朋美　土居香央里

発行　茨木市共創文化部共創推進課
監修・編集　studio-L　共創推進課
デザイン・イラスト　三枝俊輔